

美をつくし

大阪市立美術館だより

平成27年(2015) 3月1日発行



朝霧 金島桂華(1892~1974)

昭和18年(1943) 本館蔵(住友コレクション)

金島桂華は、広島生まれ、関西を中心に活躍した日本画家。竹内栖鳳に師事し、穏やかな画風の花鳥画をよくした。本作品は、昭和18年に当館で開催された関西邦画展覧会への出品作。「北国の天地を想像して、静寂とか崇厳とかの気持で」描いたという。

日本初公開! シカゴ ウェストンコレクション

肉筆浮世絵 — 美の競艶

浮世絵師が描いた江戸美人100選

2015年4月14日(火) — 6月21日(日)

浮世絵というと、写楽の役者絵、歌麿の美人画、北斎や広重の風景画、あるいは最近とりわけ人気の高い国芳の武者絵や戯画など、鮮やかな色彩で摺られた版画を思い浮かべる人が多いでしょう。近年、大阪市立美術館においても、2007年の「ギメ東洋美術館所蔵 浮世絵名品展」、2011年の「没後150年 歌川国芳展」、2012年の「北斎 一風景・美人・奇想」など、浮世絵の展示会を立て続けに開催してきました。それらの機会に、実際に浮世絵をご覧になられた方も大勢いらっしゃるのではないのでしょうか。



左/扇舞美人図(部分) 江戸時代・17世紀 ©WESTON COLLECTION
 右/髷を直す美人 西川祐信(1671-1750) 江戸時代・18世紀 ©WESTON COLLECTION

しかし、今回の展示会は、同じ浮世絵といっても趣が異なります。タイトルからもわかるように、「肉筆浮世絵」にスポットを当てた展示会となっています。肉筆画とは、絵師が絹や紙に筆で直に描いた絵のことで、いわゆる日本画のことを指すのですが、浮世絵というと版画が主であるため、区別するためにあえて肉筆画または肉筆浮世絵と呼んでいます。このことからわかるように、一点物である肉筆浮世絵は、大量生産される浮世絵版画よりも基本的に貴重なものなのです。また、絵師たちの筆づかいなどを感じることができる点においても、その価値は高いと言えるでしょう。

約130点もの肉筆浮世絵の名品が日本に里帰りする今回の展示会は、浮世絵師たちが精魂を込めて描いた作品をじっくりと鑑賞できるまたとない機会です。アメリカ・シカゴの日本美術収集家ロジャー・ウェストン氏所蔵の肉筆浮世絵は、個人コレクションとしては世界有数の規模と質を誇っており、それらの中から厳選された作品は見ごたえのあるものばかりです。また、その幅の広いコレクションからは、近世初期から明治に至るまでの浮世絵の流れを知ることができます。なお、ウェストンコレクションは今回が日本初公開になります。



美人愛猫図(部分) 葛飾北斎(1760-1849) 江戸時代・19世紀 ©WESTON COLLECTION

「美の競演 浮世絵師が描いた江戸美人100選」という展示会のサブタイトルからもわかるように、肉筆浮世絵には美人が多く描かれています。絵師が筆を用いて1点1点仕上げる肉筆画は、女性の面貌や華やかな衣裳の文様などをより精緻に表現することができる点で版画より優れており、女性の美しさに主眼が置かれる美人画にふさわしい表現方法といえるでしょう。西川祐信、宮川長春、勝川春章、歌川豊国、葛飾北斎、祇園井特、河鍋暁斎など、多彩な絵師たちが筆をふるった美人たちの競艶を、この機会にぜひお楽しみください。

(秋田達也)

根付コレクションの研究動向など

「根付」は男性が煙草入・印籠・矢立などを腰帯から提げる時、滑り止めとして用いられました。その言葉が文献で確認されるのは寛文十一年に出版された『宝蔵』まで下がりますが、近世の初頭には使用されていたことが画中資料などから窺えます。江戸時代の終わりには、実用性というよりも素材の妙、彫刻の精緻さ、主題のおもしろさなどを楽しむことのできる小さなフィギュアとして求める人が増え、膨大な数の根付が作られました。

ところが根付は開国後、それまでに作られていた古作も、新たに作られたものも含めて貿易品として盛んに輸出されたため1981年、大阪市立美術館が七百五十点の根付を購入した時には、国内には殆ど残っておりませんでした。同年刊行された美術雑誌『三彩』に掲載された西里信夫氏の一文によれば、日本で根付を所蔵していることを公表していた主な美術館・博物館は十一館、その総数は八百点に過ぎないとあります。江戸時代に大量に作られた根付は、開国後百余年の間に海外のコレクターや美術館・博物館の所蔵となってしまっていました。

なぜそのようなことが起こったのか、一因は日本の開国と同時に起きた日本美術ブームにありました。日本政府が外貨獲得のために古美術品を輸出し、海外の市場に向けて新たな美術工芸品の製作を奨励したため、1878年のパリ万国博覧会の前後をピークに欧米における日本美術ブームが一気に高まりました。パリでは新興ブルジョワジーがこぞって日本の美術品を購入しました。日本の美術品のなかでも根付に人気があったことは、日本美術愛好家ルイ・ゴンスの著“L'Art Japonais(日本の美術 1883年)”にも書かれています(図)。また近年英国で出版されたエドモンド・ドゥ・ヴァール著『琥珀の眼の兎』は、まさにその頃、パリの銀行家で美術品コレクターでもあったシャルル・エフルツシが蒐集した根付が、ナチスドイツによるホロコーストのなかを生き延び再び日本にたどり着くという数奇な運命を描いてベストセラーになりました。

根付が開国と同時に海外に盛んに輸出されるようになった理由にはもう一つの説もあります。横浜で貿易商となった三河屋幸三郎という人物が関わっていたという話です。井戸文人著『日本囊物史』(1919年刊)には、帝室技芸員であった竹内久一談として、また大阪市立美術館に戦前在職し根付研究に携わった上田令吉著『根付の研究』に

もあるエピソードが書かれています。江戸の袋物商辰巳屋で奉公していた三河屋幸三郎が店を出て、下田で土工をしていた時、たまたま出会ったアメリカの艦船の乗組員と知り合い、それをきっかけに開国と同時に根付提煙草入を輸出することを始めたというのです。二人の書いている内容は微妙に異なり、上田氏の記述は出典が明らかでは無く、風説にすぎないのかもしれませんが。しかし三河屋幸五郎をはじめ、武蔵屋大関弥兵衛など開港後、美術工芸品を売買して著名な貿易商となった人々の多くが開国以前には江戸で根付・煙草入など袋物の商に従事していたのも事実ですので、袋物商転じて横浜貿易という流れはあったはずで

す。このようにして海外に輸出された根付ですが、日本経済の発展とともに日本への逆輸入が始まりました。特に1980年代の後半から1991年の2月まで続いたバブル景気の時期には、海外のオークションに日本のディーラーやコレクターが積極的に参入し、作品を落札することも日常的になりました。海外根付コレクターと日本のコレクターの交流も盛んになり、根付を展示する機会も増えました。そのため日本国内における根付愛好家も増加し、また現代根付の製作も続けられ、近年はフィギュアブームに触発されて注目度も以前よりは高まっています。

しかし根付研究の進展は遅々としています。美術史の一分野ではありますが、印籠・緒締、袋物・金具・煙管・煙管筒など多岐にわたる器物と一具になっており、素材や技法や主題も多彩です。明治になってから輸出のために作られたものとはいえ、江戸の伝統を受け

継ぐ上質のものも多く、その区別は容易ではありません。そして未だに大量の根付が欧米に所蔵されており、調査には莫大な費用がかかります。そのためコレクターが研究者を兼ねる場合が多く、根付以外の日本美術史研究との連動性が希薄であったりもします。

大阪市立美術館のコレクションに根付が加わって三十年以上になります。国内から一歩も出ずに残された貴重な資料です。その間、作品の調査・展示は続けており、海外コレクションの根付に関するコレクションの特別展も予定しています。しかし今後のさらなる研究の進展のためには、デジタルデータの公開が急務であると考えています。

(土井久美子)



“L'Art Japonais”に掲載されたゴンスの根付

伝説の洋画家たち 二科100年展

2015年9月12日(土)―11月1日(日)



東郷青児 ビエロ 1926年 第15回展
東郷青児記念損保ジャパン日本興亜美術館蔵



岸田劉生 静物(湯呑と茶碗と林檎三つ)
1917年 第4回展 大阪新美術館建設準備室蔵



小出楯重 帽子をかぶった自画像
1924年 第11回展 石橋財団ブリヂストン美術館蔵

「美術の春」、「芸術の秋到来」ということで、さまざまな美術団体に所属する作家たちは毎年、円熟した制作態度を表明し、またテーマや技法などに新たな試みを盛りこんで作品を発表します。いつのまにか「公募展は日本の文化。」(国画会)とまで称されるようになってはいるのですが、職能集団である画壇や会派は、自我や個性を尊重する「近代」の芸術家のありかたとはすこし様相がちがって今では国際的にも際立つ存在であり、これは師弟関係や技術の伝承を大切にしている日本人の芸術的伝統や心性とどこかで通底しているものがあるのかもしれない。

ともあれ、芸術は既成の価値観と鋭く対立しながら「発展」するものとしたら、ちょうど100年前、審査方法や運営をめぐり、当時官展とみなされていた文部省美術展覧会(略称『文展』)と袂を分かち、在野の公募展として二科会は誕生しました。以来、会派としての自由で開放的な姿勢は今日まで一貫して変わらず、芸術家たちも、ある者は欧州で学んだ最新の芸術思潮を紹介し、さらにある者は日本的絵画の拠り所となるべく野心的な作品をつぎつぎと発表してきました。

たとえば小出楯重は、『帽子をかぶった自画像』(1924年・石橋財団ブリヂストン美術館蔵)でイーゼルを立て鏡に映る自画像を描きこもうとしています。西歐風のアトリエのように見えても、じつは大阪市内中心部・島之内の純然たる日本家屋の二階和室に絨毯を敷き詰めただけの空間。日本人が西歐起源の油彩表現を我が物にする困難さをよく知っていた楯重は、「骨人画家」と自称したほどの病身瘦軀であったにも関わらず、和服を捨て洋服をまとい、椅子とベッドの生活、パンとバターを食するなど衣食住全般にわたり西洋的生活を晩年まで貫きとおしました。命と引き換えにするほど新しい芸術的価値の創造に努める楯重の真摯な姿勢は、古賀春江、岸田劉生、関根正二や村山槐多、佐伯祐三など、この展覧会で紹介される数多くの画家たちとも共通しています。

二科会100年の歴史、日本人が洋画や彫刻を自家薬籠中のものするために努力してきたもうひとつの日本近代美術史を、『伝説の洋画家たち 二科100年展』を通してお楽しみください。

(篠 雅廣)

五月人形 丸平と永徳齋

2015年4月14日(火)―5月17日(日)



大正から昭和初期にかけての東西を代表する人形師、京都の丸平大木人形店の4世大木平蔵(1885-1941)、5世大木平蔵(1885-1941)、東京の人形司永徳齋の2代山川永徳齋(1858-1928)、3代山川永徳齋(1865-1941)によって制作された、鍾馗・武者・飾り馬などの五月人形の優品を陳列いたします。

3代山川永徳齋(1865-1941) 鍾馗
昭和時代・20世紀 個人蔵

香の道具

2015年4月14日(火)―5月17日(日)

香は仏教の儀式で用いられ、仏前を清め邪気を払うと信じられてきました。平安時代には香を焚きしめうつり香を楽しむことが貴族の間に広まります。そして香を鑑賞する寄合が茶や花とともに始まり、やがては香道となっていきます。当館の所蔵、ご寄託の作品から、香合・香箱・香炉など香に関わる道具を展示いたします。



蒔絵 小犬形香合 江戸・明治・19世紀
本館蔵(カザールコレクション)

清風の茶、煎茶の美

2015年4月14日(火)―5月17日(日)

江戸～明治時代にかけて大坂(大阪)と京都を中心に、抹茶の「茶の湯」とは異なるお茶、葉茶からいれる「煎茶」の楽しみがありました。涼炉・茶注(急須)・茶心壺・煎茶碗・水注など煎茶人たちの美意識を反映した作品や、煎茶書・茗謙図録を展覧します。



「第1席喉潤」
『青濁茶会図録』
田能村直入編
江戸・文久3年刊(1863)
大阪市立美術館
谷村為海煎茶関連資料

動物と美術 ―日本画と工芸―

2015年4月14日(火)―5月17日(日)

当館に隣接する天王寺動物園は、本年1月1日に開園100周年を迎えました。これを記念し、館蔵・寄託の近代日本画および東洋の工芸の中から動物をあらわした作品を展示いたします。美術に見られる動物たちの愛らしい姿をお楽しみください。

※表紙掲載の「朝霧」も展示予定

灰陶加彩 駱駝 北魏時代・6世紀 本館蔵



燕文貴
江山樓觀圖(部分)
北宋時代・11世紀前半
本館蔵
(阿部コレクション)

山水 ―中国書画

2015年5月19日(火)―6月21日(日)

山水は中国画において最もよく描かれる主題のひとつです。描かれた山水は、神仙の住まう聖域として、また隠棲の理想の地や憧れの景勝地として、鑑賞者の心をとらえつけてきました。このたびは本館の所蔵および寄託の作品から、山水を中心とした優品をご紹介します。

経典

2015年5月19日(火)―6月21日(日)

当館は田万コレクションに含まれる経典などを所蔵するほか、関西地区の寺院や個人からも優品が寄託されています。このたびは、中国隋・唐の影響を受けた謹厳端正な書風の奈良時代から、和様化した温雅優美な書風を示す平安時代にいたる遺品を展覧します。



華嚴経断簡(二月堂焼経) 奈良時代・8世紀 本館蔵(田万コレクション)

遊楽と美人

2015年5月19日(火)―6月21日(日)

寺社などの名所とは異なる非日常的な遊楽の空間―遊里。豪壮な数寄屋風邸宅の内外に、酒宴やさまざまな遊戯に熱中する人々の姿を描いた「邸内遊楽図」、一人の遊女の立姿だけをクローズアップした「寛文美人図」など、江戸時代初期に流行した遊楽図と美人図をご紹介します。

邸内遊楽図(部分)
江戸時代・17世紀 本館蔵



四季を愛でる

2015年5月19日(火)―6月21日(日)

四季にうつろう自然の美しさ、はかなさを愛でる繊細な心情は、美術、文芸など日本の芸術に通底する独特の美意識です。「雪月花」、「花鳥風月」に象徴されるさまざまな自然の風物をはじめ、四季とそのうつろいを抒情豊かに表現する絵画作品をご紹介します。



徒然草絵巻(部分)
土佐光起
江戸時代・17世紀
個人蔵

俑の世界

2015年
7月14日(火)―7月26日(日)／
8月4日(火)―8月30日(日)

俑とは墓に副葬するために陶器などで作られた「ひとがた」のことですが、近年の中国では動物や建物などの副葬品も俑と呼んでいます。今回は前漢～唐時代の人物・動物・建造物の俑を中心に展覧します。時代ごとに大きく異なる俑の造形をお楽しみ下さい。

三彩 文官(部分) 唐時代・8世紀
大阪市立美術館 吉村芳野氏寄贈



仏教工芸

2015年8月8日(土)―8月30日(日)

仏教で礼拝の対象となる舎利・仏像・経典などを荘厳・供養するための器物は、制作当時の最良の素材と最高の技術、そして最新の意匠が用いられました。このような工芸史を彩る名品のうち、今回は金工品に焦点を当てて展示いたします。夏の一日、仏教工芸の清涼な世界をご堪能ください。

金銅 三鈷鈴 鎌倉時代・13世紀
本館蔵(田万コレクション)



輸出漆器 桃山～明治

2015年7月14日(火)―7月26日(日)／8月4日(火)―8月30日(日)



花鳥蔀絵螺鈿聖龕 桃山時・16世紀 個人蔵

日本の輸出漆器を展示します。16世紀の中頃、ポルトガル人宣教師がカトリックの布教のために渡来し、日本からヨーロッパへ漆器の輸出が始まります。キリスト教の祭具や箆笥や櫃などの調度品が蒔絵や螺鈿を用いて制作されました。日本の漆器

はヨーロッパの王侯貴族の間で好まれ、輸出はキリスト教の禁教、鎖国の後もオランダや中国を経由して輸出されました。

沈没船からの贈り物

2015年8月8日(土)―8月30日(日)

ベトナム～東南アジア周辺に沈んだ船から引き揚げられた陶磁器を展覧します。ベトナムのホイアン沈没船のベトナム陶磁をはじめ、コンダオ沈没船、ダイアナ号、カーマウ沈没船の中国清代の青花などを陳列します。涼やかな青花の藍色をご堪能下さい。



青花有蓋瓶ほか コンダオ沈没船引揚品 清時代・17世紀 個人蔵

螺鈿 中国・朝鮮半島・日本

2015年7月14日(火)―7月26日(日)／8月4日(火)―8月30日(日)

鮑や夜光貝を用いた漆器の装飾は中国・朝鮮半島・日本・タイなどアジアの諸国で盛んに行われていますが、地域や時代によって多彩に発展してきました。ここでは当館の収蔵品とご寄託品のなかから、各地の螺鈿漆器の優品をとりあげてご紹介したいと思います。



螺鈿 楼閣人物図長方盆 明時代・16-17世紀 本館蔵(田万コレクション)

堆朱・鎌倉彫・根来

2015年7月14日(火)―7月26日(日)／8月4日(火)―8月30日(日)

朱漆を塗り重ね図を彫り表した「堆朱」、文様を彫り漆を塗った「鎌倉彫」、黒漆を下塗り、朱漆を上塗りした「根来」、堆朱は漆を塗り重ね文様を彫り著した彫漆、鎌倉彫は木に文様を彫り漆を塗る彫木漆塗、根来は木の器に黒漆を下塗り、朱漆を上塗した漆器に用いられた呼び名です。ここでは当館ご寄託品から三つの技法の作品を選んで展示いたします。

重要文化財
鎌倉彫(彫木漆塗)牡丹文大香合
室町時代・15世紀 南禅寺蔵



大阪市立美術館 天王寺公園内

Osaka City Museum of Fine Arts

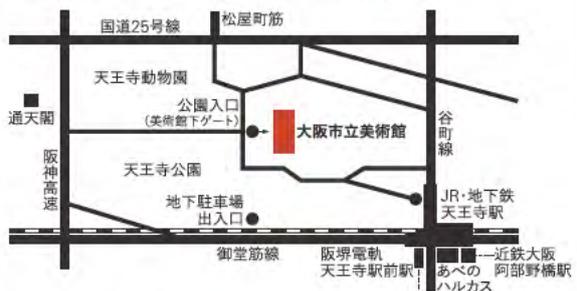
〒543-0063 大阪市天王寺区茶臼山町1-82

tel. 06-6771-4874 fax. 06-6771-4856

<http://www.osaka-art-museum.jp>

開館時間＝9:30～17:00(入館は16:30まで)

休館日＝月曜日(ただし月曜日が祝日の場合は翌日)



交通案内：地下鉄御堂筋線・谷町線、JR「天王寺」、近鉄南大阪線「大阪阿部野橋」、阪堺電軌上町線「天王寺駅前」下車、または市バス「あべの橋」下車、北西へ400m